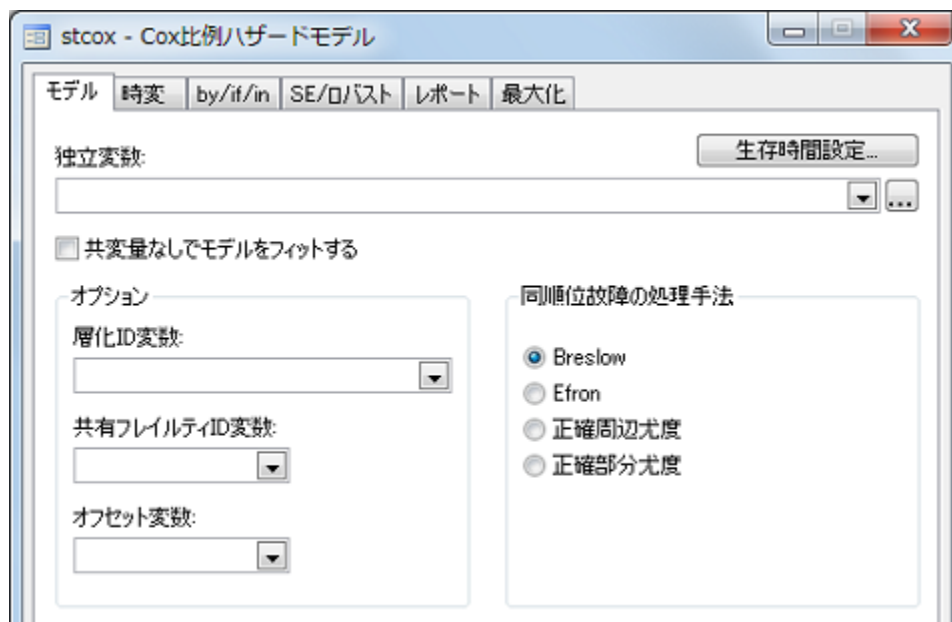



Stata13 からの移行性について

- | | |
|---------------------------|------------------|
| 1. 日本語ダイアログ | 5. glogit 系コマンド |
| 2. Postestimation インタフェース | 6. sts test コマンド |
| 3. 擬似乱数 | 7. 日本語データ |
| 4. マニュアル区分 | |

1. 日本語ダイアログ

Stata14 を起動して最初に目に付くのは操作画面やメニューダイアログが日本語化されている点です。日本人にとっては歓迎すべき進化かも知れませんが、注意を要する側面もあります。例えば図 1 は生存時間分析用の代表的なコマンドである `stcox` 起動用のダイアログです。

図 1 `stcox` 日本語ダイアログ

この場合、“層化”というオプション機能の内容を確認すべくダイアログ下部のヘルプボタン  をクリックしてみてください。stcox コマンドの構文やオプション機能に関する情報が提示されてくるわけですが、すべて英文です。製品に付帯している PDF マニュアルを参照したとしても、その記述はやはり英文です。“層化”という機能については strata() というキーワードのもとに記述があるわけですが、そのマッチングを取るのに苦労を強いられる局面も想定されます。その意味で、ヘルプ情報や英文マニュアル情報の確認が必要な段階においては、従来通りの英語インタフェースの使用が推奨されます。



Math 工房の日本語解説書はすべて英語インタフェースを前提とした記述となっています。また専門的なキーワードについては必ず日本語と英語を併記するような配慮を行っています。

操作インタフェースの切替えは次のようにして行えます。

日本語 → 英語	<ul style="list-style-type: none"> ● 編集 ▷ ユーザ設定 ▷ ユーザーインタフェイス言語 ▷ English ● Stata の再起動
英語 → 日本語	<ul style="list-style-type: none"> ● Edit ▷ Preferences ▷ User-interface language ▷ System default ● Stata の再起動

いずれの場合も Stata を再起動しないと設定が有効にならない点に注意してください。



Stata14 における日本語関連の新機能としてはもう 1 つ Unicode サポート があげられます。これはデータの中に日本語を含められるようにしたもので、上記の日本語操作インタフェースの話とは別個の機能です。詳細については

[U] 12.4.2 Handling Unicode strings

[D] unicode

の項をご参照ください。

2. Postestimation インタフェース

Stata14 では postestimation 系機能に対する操作インタフェースが図 2 に示したようなセレクトアを介する形に改められました。

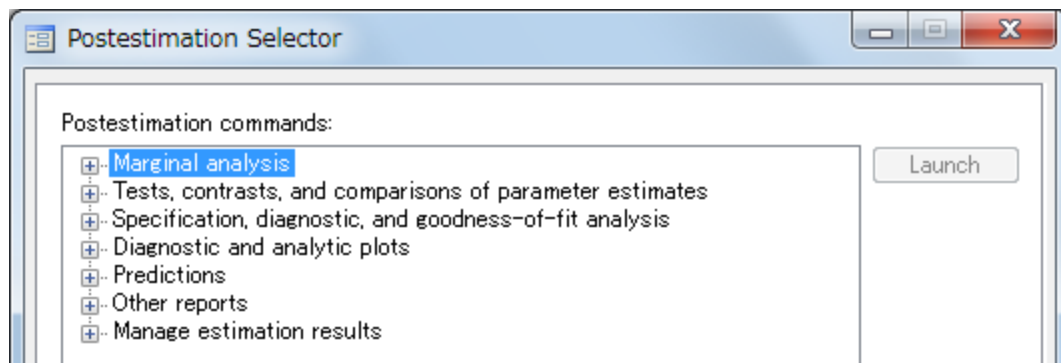


図 2 Postestimation Selector

主だった postestimation 系コマンドのダイアログを表示させるにはどう操作したら良いかを簡単に説明しておきます。

(1) predict 系コマンド

直前にフィットされたモデルに基づき予測値や残差等の計算を行うためのコマンドが predict であるわけですが、そのダイアログを起動するには図 2-1 のように選択を行い、Launch をクリックします。

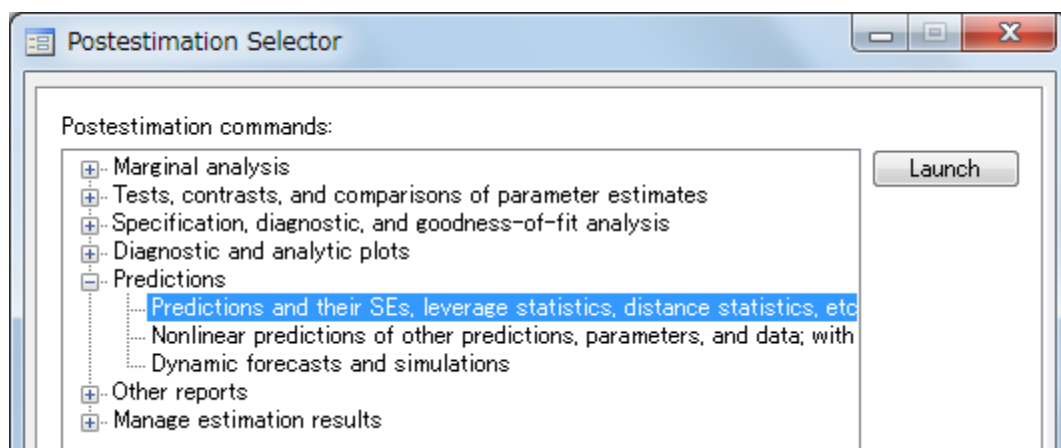


図 2-1 predict 系機能

選択肢として表示されるテキストは起動されるコマンドの機能概要を示したものであるため、同じ predict であっても直前に実行された推定コマンドが何であるかによって文言は異なったものとなります。図 2-1 は regress コマンド実行後の例です。

(2) estat 系コマンド

フィットが適正であったかどうかを検定するためのコマンドが estat 系サブコマンド群として用意されているわけですが、それらを起動するには図 2-2 に示した機能区分を用います。

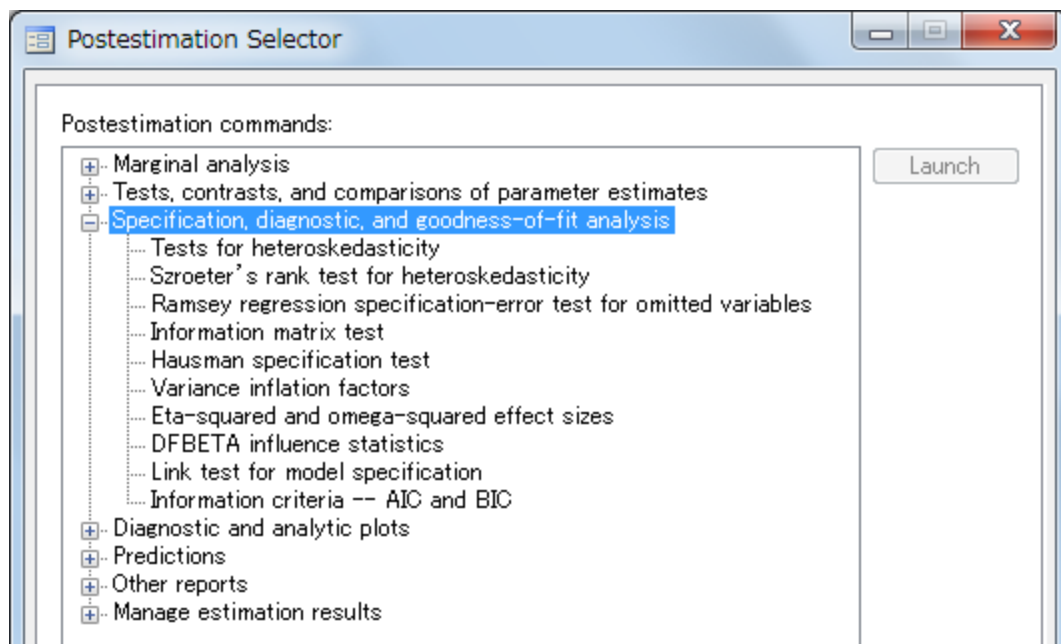


図 2-2 estat 系機能

例えば分散不均一性 (heteroskedasticity) を検定するための `estat het` コマンドを起動したければ Tests for heteroskedasticity という項を選択し、Launch をクリックします。なお、この機能区分にリストされる項目の数とその内容は推定コマンドに依存したものとなります。図 2-2 に示したものは `regress` 実行後の状態を表しています。

(3) test 系コマンド

パラメータ推定値に対して種々の検定や比較を行う機能が `test`, `contrast`, `pwcompare` 等のコマンドとして実装されているわけですが、それらのコマンド用ダイアログを起動したい場合には図 2-3 の機能区分を用います。

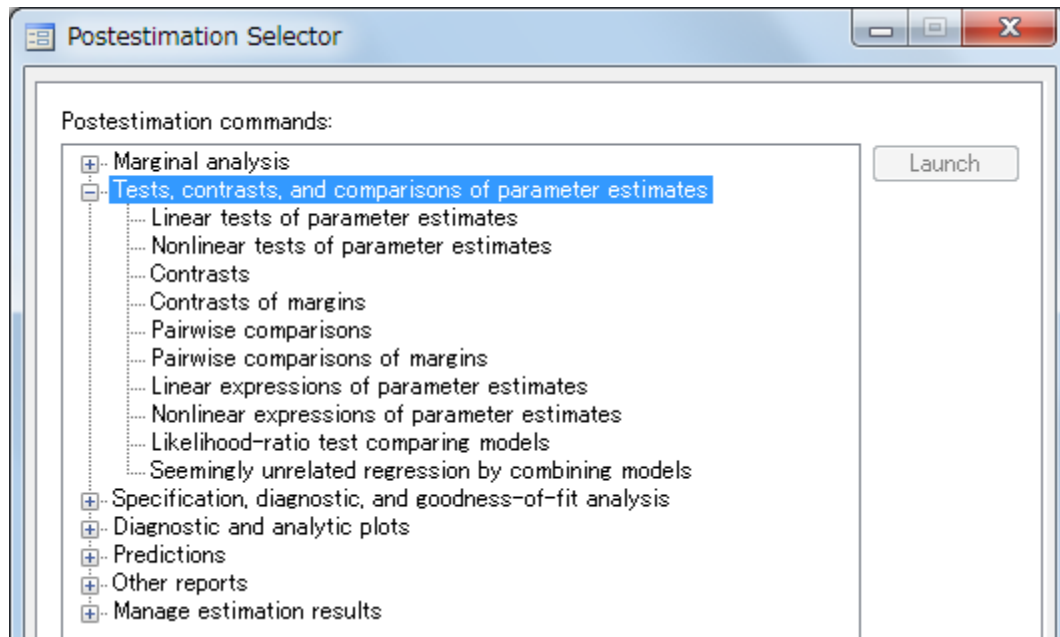


図 2-3 test 系機能

例えば先頭の Linear tests of parameter estimates という項を選択し Launch をクリックすれば、`test` コマンドが起動できます。

(4) 診断プロット系コマンド

診断プロット系のコマンドは図 2-4 の機能区分の中で選択できます。

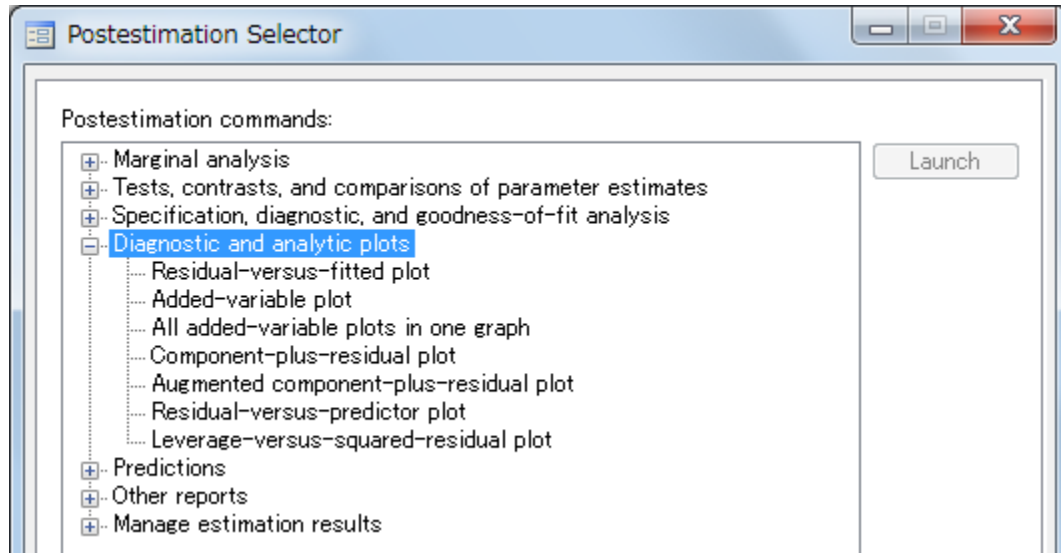


図 2-4 診断プロット系機能

(5) margins 系コマンド

マージン分析を行いたい場合には margins コマンドを使用するわけですが、そのためのダイアログが刷新されました。

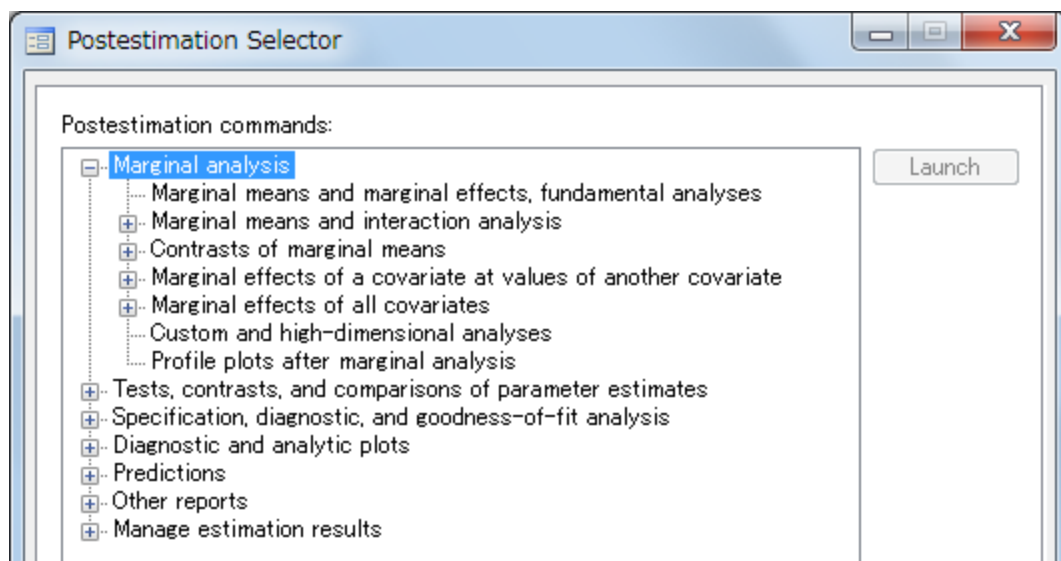


図 2-5 margins 系機能

上位に位置する選択肢を選択した場合には新たなダイアログが表示されることになります。Stata13 と同一のダイアログを表示させたい場合には Custom and high-dimensional analyses という項を選択し、Launch をクリックしてください。

(6) estimates 系コマンド

推定結果の保存等、種々の管理操作を行いたい場合には図 2-6 の機能区分を使用します。

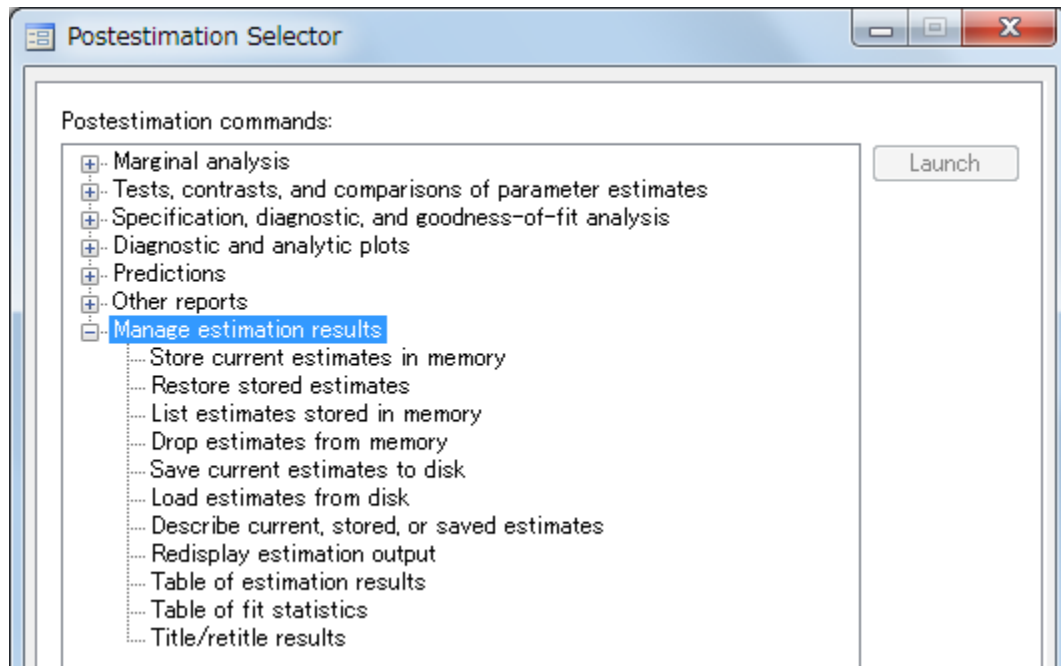


図 2-6 estimates 系機能

例えば先頭の Store current estimates in memory という項を選択し Launch をクリックすれば、メモリ上での退避を行う estimates store ダイアログを表示させることができます。

3. 擬似乱数

これは操作性というよりは互換性の問題ですが、擬似乱数の発生機構がより性質の優れたもの (64-bit Mersenne Twister) に置き換えられました。このため乱数発生を用いたプロセスは結果が異なったものとなります。なおバージョンコントロールのメカニズムにより、従来の乱数発生機構 (KISS32) を継続使用することも可能です。詳細については [FN] マニュアルをご確認ください。

4. マニュアル区分

英文マニュアル上、次のコマンドや機能に関する記述部の配置が変りました。

- `epitab` 系コマンドの仕様、用例は従来 [ST] マニュアルに記載されていたわけですが、Stata14 からは [R] マニュアルに移設されました。
- 関数 (functions) に関する記述は従来 [D] マニュアルに含まれていたわけですが、Stata14 からは [FN] マニュアルとして独立しました。

5. `glogit` 系コマンド

グルーピングされたデータに対して従来 `blogit`, `bprobit`, `glogit`, `gprobit` というコマンドが用意されていましたが、Stata14 ではサポートが打ち切られました。より汎用性の高い `glm` コマンドの使用が推奨されています。

6. `sts test` コマンド

生存時間分析系のコマンドである `sts test` に対しバグ修正が施されました。このため

- Peto-Peto-Prentice 検定、または
- Fleming-Harrington 検定

を使用した場合に実行結果に差が生じることがあります。詳しくは Stata 上で `help whatsnew13` とコマンド入力することにより確認することができます (#17, 18 参照)。なお、Stata13 でも 17 April 2015 のアップデートが適用されている場合には実行結果は Stata14 と同一のものとなります。

7. 日本語データ

従来からもデータ中のラベル情報は日本語化することができましたが、そのようなデータを Stata14 で表示させた場合には文字化けが発生します。これは多国語サポートが Unicode で統一的に行われるようになったためです。日本語を含むデータの移行方法については

tb033: Unicode への変換

をご参照ください。

■